

最近のカンボジア事情について

小林：カンボジアは相次ぐ内戦により、物的なインフラだけでなく社会・経済的なインフラが破壊されました。人口ピラミッドも中高年齢層が極端に少ない非常にゆがんだ形をしています。逆に言えば、若者で構成される非常に若い国です。とりわけ、ポルポト政権下で知識層に対するジェノサイドにより、カンボジアの教育システムは崩壊しました。カンボジアにおける教員・教材・施設などの不足は深刻です。大学をはじめとする高等教育システムの整備が急務となっています。一方、カンボジアと日本の関係は古く、カンボジアには親日家も多いと聞いています。今日は、日本に留学し、名古屋大学で博士号をとられたンガウ・ペンホイ先生に、最近のカンボジアの大学やインフラ事情についてお尋ねしたいと思います。今日は、ペンホイ先生に質問を提示し、それにお答えいただくという方式で対談を進めたいと思います。

ペンホイ先生のご専門は国際開発経済学で、現在は王立プノンペン大学の名古屋大学カンボジアサテライトキャンパス拠点で名古屋大学特任准教授として、日本とカンボジアの架け橋として活躍されています。ペンホイ先生に、まずカンボジアにおける最近の大学事情についてお尋ねしたいと思います。

【大学、教育について】

ペンホイ：カンボジアの大学では、まだ教授昇進システムができていません。学長も講師です。年齢ではなく、留学経験の有無で知識の差が出てくると言われています。私立大学では、質は悪いが博士を出す大学は結構あります。プノンペン大学は国立大学であり、簡単には博士は出していません。

プノンペン大学では、准教授、教授の輩出が大きな課題になっています。今年の7月に選挙で教育省の大臣が決まりますが、教育相が中心になって教育改革を推し進め、大学の教授、准教授制度を確立していく必要があります。管轄省庁の異なる他の大学、例えば、農水省管轄の農業大学、厚労省管轄の医学大学がありますが、これらの大学には教授制度があります。大学を教育省に統合するののかという検討も含めて、今後の教育改革を推し進めていく必要



Dr. Ngov Penghuy:

**Senior Lecturer, Faculty of Development Studies,
Royal University of Phnom Penh, Cambodia.**

があります。留学先としては、経済的な問題から必然的に奨学金を一番多くもらえる国を選ぶことになります。今 40 歳から 50 歳の世代のほとんどは、日本に留学した人が多いです。60 歳から 70 歳代の方はロシアです。最近では、アメリカとオーストラリアが多く、最近ではシンガポールが増えてきました。韓国はまだ少なく、4・5 年前から奨学金を多く提供するようになった中国に留学する学生も増えてきました。

小林：フィリピンやインドネシアでは、K-POP をはじめとする韓国文化の影響もあり、私費で韓国に留学する人が増えてきているようです。一方、日本のアニメはほとんど放送されなくなり、過去のものになりつつあると聞いています。



先生がおっしゃったように、かつてはカンボジアから日本に沢山の留学生がやって来られた。ペンホイ先生のお話をうかがうと、このような関係を継

続するためには、奨学制度の充実が重要ですね。オーストラリアへの留学が多いのは、地理的に近いからでしょうか。

ペンホイ：アメリカやイギリスほど費用がかからないのと、英語圏であることが大きな理由です。サウスオーストラリアのアデレード、メルボンとかシドニーあたりが主な留学先です。

小林：日本の大学に望むところを聞かせてください。

ペンホイ：カンボジアは、これから製造業が発達していかなければはいけないと思います。そのためにも、理系の教育がとても重要になってきます。日本の大学と共同研究なり、カリキュラム開発を行い、より緊密な関係を形成できればと思います。

小林：カンボジアの教育システムについて、これから制度的に充実されるのだと思います。大学教育に関して、これからアメリカの大学制度、あるいはヨーロッパ型大学制度にするのか、参考にされている大学教育モデルというのがあるのでしょうか。

ペンホイ：そういう議論はあまり聞いたことがありません。ASEAN 内での大学の移動は自由にできるので、ASEAN 内における教育の標準化が必要です。英語による教育の重要性は認識していますが、実際にはまだ実施できていないのが現状です。英語により教育できる人材が不足していますし、英語を理解できない学生がいるので、現時点で英語による講義を行うことは難しいと思います。

カンボジアでは、プノンペン地域であれば、英語は結構通用しますね。子供たちの多くが、インターナショナルの学校に通っているのです。英語を使うことができる。現在 10 歳の子が 20 歳になる頃には、英語による講義を行うことができるようになると思います。

【土木工学について】

ペンホイ：最近、カンボジアでは土木工学の人気が出てきました。建設業が発達し、ビルの建設が活発に行われてきています。また、政府も教育改革の一環で、ソーシャル・サイエンスからナチュラルサイエンス、エンジニアリングへと高等教育の比重を移行しようとしています。学生も労働市場から、理系人間が必要とされていることを理解しています。また、理系学生に対する給与水準もいいです。建設業も最初は外資系企業が多かったですが、最近ではカンボジア企業が下請工事を受注できるようになりました。

インフラ建設は国による直轄事業がほとんどで、民間事業やPPP事業は行われていません。大きなインフラ事業は、ほとんどODAとして実施されており、国が事業主体となっています。補修、維持・管理も国直轄で行っています。

小林：大学では、メンテナンスに関する研究・教育を始めていますか。

ペンホイ：カンボジアで一番優秀な工学系の大学である Institute of Technology of Cambodia では、JICA の支援によってメンテナンスに関する研究も進んでいると聞いています。

小林：先生が現在所属されている、名古屋大学サテライト拠点の活動について、ご紹介ください。

ペンホイ：名古屋大学がカンボジアに、博士プログラムのサテライトオフィスを作ったのです。私は兼任でサテライトオフィスに所属しています。名古屋大学では、政府の中核人材育成プログラムがありまして、政府高官、ポリシーメイキングレベルの博士課程を運営しています。カンボジアで仕事をしながら博士研究を行うことができ、年に1回大体2～3週間程度名古屋大学に滞在し、博士研究を深堀します。名古屋大学の指導教員も、年に1～2回カンボジアに出張し、学生指導を行っています。それ以外は、主としてテレビ会議システムを用いて講義や研究指導を行い、レポート課題等により理解度をフォローアップする。そういう方式で、博士課程プログラムを運営しています。

小林：カンボジアの将来を考えると、インフラ整備が必須の条件だと思います。その意味において、大学における土木工学の教育・研究が極めて重要だと思います。そういう機運というのが、育ってきていますでしょうか。

ペンホイ：素人的な考え方ですが、道路はもっと整備しないといけないと思います。とりわけ、メコン川の存在がモビリティの障害になっていますので、橋梁数を増加させること必要があります。現在、タイとの経済的なつながりがほとんどですが、今後は、ラオスやベトナムとの経済的連携を強化していくことが必要です。



そのために、近隣国と連結するインフラの整備が不可欠だと思います。

【カンボジアのインフラ整備について】

ペンホイ：カンボジアのインフラ整備については、この 10 年でプノンペン地域の道路・橋梁だけでなく、プノンペンと地方を結ぶ幹線道路の整備が、かなりの程度進捗しました。ほとんどが中国、日本、ADB による ODA が主体となっています。バンコクからプノンペン、ホーチミンへの幹線道路についても、日本の ODA が中心となり整備が進展しています。

タイとの国境近いポイペットからプノンペンに通ずる 5 号線については、1 車線の箇所もまだありますが、2 車線化がだいぶ進んでいます。2018 年から 2022 年までには全区間が 2 車線になる予定です。物流でもこの 5 号線が一番使われています。

小林：カンボジアは、プノンペンに一極集中しているというイメージがありますが、どうでしょうか。

ペンホイ：確かにプノンペンに人口や経済活動が一極集中しています。第二位の都市が発達していないのが問題です。

最近、地域開発で特筆すべき動きがあります。シアヌークビルの発展です。中国人が土地を買収し、高層ビルが林立し、土地の価格が 2 倍、3 倍と急増しています。シアヌークビルには、カンボジア人はほとんど住んでいません。ほとんど中国人が居住しています。カジノとリゾート開発が計画されており、メディアは「カンボジアのマカオ」と呼んでいます。現在はすでに空港が整備されており、飛行機でシアヌークビルに行くことができますが、中国資本により巨大な空港が整備される予定になっています。プノンペンからですと、国道 4 号線という立派な道路でシアヌークビルに行くことも可能です。

小林：近隣諸国との間の舟運は、どうでしょうか。

ペンホイ：舟運を使ってでカンボジアからラオスへ行くことは不可能で、ベトナムからカンボジアには国際舟運が可能です。

小林：次に、交通システムについてお聞きしたいと思います。

ペンホイ：鉄道は整備されてきています。現在運営されている鉄道は、プノンペンからシアヌークビルまでつながっています。スピードは遅いのですが、週何回か運行しています。さらに、プノンペンからタイの国境であるポイペットまでを結ぶ路線は一部繋がっていない箇所がありますが、今年中には繋がり、ポイペットまでの物流も効率化される予定です。物



資流動の基本は陸路です。高速道路はまだありませんが、地方道路、幹線道路に関してはかなり整備が進んできています。もちろん、幹線道路等で未整備な路線もありますが、ローカルな路線の整備は、非常に遅れていますね。

【産業について】

小林：つぎに、カンボジアにおける産業構造についてお聞きしたいです。カンボジアの主力産業は、依然として縫製業やテキスタイル産業なのでしょうか。

ペンホイ：縫製・テキスタイルで、輸出の約 6 割から 7 割を占めています。カンボジアの GDP は約 200 億ドル程度ですが、縫製業の輸出だけで 80 億ドル程度になります。縫製業の生産拠点の多くがプノンペン市内に立地していますが、プノンペン市の周辺地やシアヌークビル港湾経済特区にも立地しています。

小林：かつて、タイを中心とした周辺諸国におけるサプライチェーンの発展を「タイプラスワン」と呼んだことがあります。いまでも、タイとの国境近くに多くの工場が立地する現象は顕在でしょうか。

ペンホイ：ポイペット地域が有名ですね。ポイペットは、タイ側の都市アランヤプラテートと接しています。タイの製造業で人手不足や賃金上昇が進んだことから、日系企業を中心に工場の進出が相次いでおり、豊田通商が工業団地「テクノパーク・ポイペト」を開設しました。プノンペン経済特区と同様に一緒にポイペットにも経済特区が指定されています。今後、タイはデジタルエコノミーに移行していくので、付加価値の低いものはタイからカンボジアに生産拠点がシフトすることを想定しています。タイ側でもアランヤプラテートに経済特区をつくる計画はあったのですが、現在のプラユット政権の下で計画は頓挫しています。そのほかのタイ・カンボジアとの国境地域や、タイ・ミャンマーの国境地域でも経済特区を建設する動きは止まっています。理由は、日系企業を含む外資系企業にとって、カンボジアにおける労働賃金とタイにおける最低賃金の間に格差があり、タイ側で生産するとコスト高になってしまうことです。

小林：タイプラスワンが発展するためには、タイ・カンボジア国境地域における通関手続きの簡素化や効率化が不可欠です。今でも、通関手続きに関する二国間協議を継続されているのでしょうか。

ペンホイ：カンボジア政府にとって、経済統合を実施することによるデメリットが大きい



めに、国境における通関手続きの簡素化に関する交渉は難航している状況です。

小林: ラオスは天然資材を擁しているのに、国内の産業が育たないようですが、カンボジアの縫製は国内資本で行っているのでしょうか。

ペンホイ: カンボジア国内における投資は、ほとんど外国資本で行われています。カンボジアは 1990 年代中頃から、FDI 誘致政策を打ち出しました。その結果、国内資本はほとんど育っていません。1980 年代は、カンボジアは社会主義国家であり、その当時の企業はほとんど国有企業でした。国有企業は生産性が極めて低かったのです。1990 年代に入り、国内資本市場が育っていない段階で、市場経済に急速に移行しました。外資はほとんどが中国系です。当時制定した投資法の下では、外資系企業が生み出した利潤は、それぞれ母国に持ち帰れることになっています。カンボジアには、企業を設立するような資本や技術がないので、雇用創出のために外資系企業の誘致を推進しました。これからカンボジアは、国内産業の育成を目指した法整備を行っていく必要があります。



小林: カンボジアの健全な発展のためには、国内の資本市場を育てていく必要がありますね。カンボジア国内で、いわゆる起業家・起業家精神は育ってきていますか。

ペンホイ: 最近、プノンペンでも起業家セミナーが頻繁に開催されるようになりました。起業家精神 (entrepreneurship) という言葉も、国民の間にかかなり広がったと思います。しかし、起業家セミナーは、ビルの警備といったサービス業や I T 関係を対象としたものが主体で、製造業分野における起業家セミナーは、ほとんど開催されていません。

小林: 外資にとって、カンボジアは労働力を輸出しているということになるのでしょうか。

ペンホイ: そのとおりです。人口は 1 億 6000 万人。但し、若い人口が多いです。

小林: 外資系の製造業、企業を除くと、産業は農業が中心ですか。

ペンホイ: 農業は、GDP の 3 割程度を占めています。労働人口は、以前は 7 割程度でしたが、今は 4 割程度に減ってきています。労働力が地方から皆プノンペンに移ってきており、産業構造の変動が起こっています。

【国民生活、観光について】

小林: カンボジアの人が海外旅行に行くのはこれからでしょうか。

ペンホイ: ASEAN 地域内では、ビザがいらないので旅行者が増えています。日本に行く旅行者も増えてきています。

小林: 去年・一昨年あたりからベトナムが変わってきています。一般の人々が週末に自家用

車で家族旅行をするようになりはじめました。昔は考えられなかったです。道の駅には人が入っていないけど、パーキングエリアのベトナム風レストランは、土日や週末は大変混んでいます。金持ちは海外旅行が普通になってきていますが、一般の人々が週末に観光ができるようになるかどうか、地方都市が発展するかどうかの鍵になってくると思います。カンボジアで国内観光が大衆化するまでには、まだ時間がかかりそうですね。

ペンホイ：カンボジアでは貧富の差もまだ大きいので、旅行が大衆化するまでには、かなり時間がかかりそうですね。今の経済成長はほとんどプノンペンに集中しており、地方は経済成長の恩恵をそれほど受けていません。地方が経済成長の恩恵を受けるようになれば、地方部のインフラの整備も進展し、プノンペンで地方の生産物がもっと売れるようになると思うのです。



海外からの観光客は、ほとんどアンコールワットにいてプノンペンには寄らずに帰ります。プノンペンには、絆ストリートという日本人街があります。また、6月1日、4年ぶりに2つめのイオンモールが出来て賑わっています。買物客のほとんどはカンボジア人です。

小林：カンボジアの観光政策はあるのでしょうか。アンコールワットあたりには、まだ観光客を受け入れるキャパシティがあるのでしょうか。

ペンホイ：観光客を受け入れるキャパシティは限界にきています。建物は増やせるらしいのですが、地下水の問題があるようです。

小林：仏教を中心にした国はラオス、タイ、ミャンマー、カンボジアやスリランカと日本くらいですよ。カンボジアは宗教に対して敬虔ですが、仏教に対するアイデンティティを中心に、仏教国が連携するというような話はほとんど聞いたことがありません。先日、古都ウドンの仏教遺跡を訪ねましたが、沢山の信者の方が見られていて感動を覚えました。

ペンホイ：残念ながら仏教を通じたアイデンティティは、それ程持ち得ていません。年配の方は宗教に熱心ですが、若い層は宗教の考え方に対してよりベラルになってきています。

【日本に対する印象】

小林：日本のグローバル化、あるいは日本企業に対してどういう印象を持っていますか。

ペンホイ：日本人に対する講義から得た感覚では、ASEAN 諸国に出ていこうという意識が見えましたが、実際に ASEAN 諸国で活動しようとする日本人は少ないですね。もったいないと思います。世界は、以前よりはるかに繋がっているのに、日本人は海外の人間と繋がろうとしない。日本全体として、海外につながるという姿が見えてこない。他の人が出ていくの

で、自分が出ていかないでいいと思っているかどうかはわかりませんが、もし、そうであると寂しいと思います。

カンボジアに来ている日本人も以前は ODA 関係者が多かったのですが、今は企業関係者が多いです。日本大使館に登録している日本人は約 3,000 人、登録していない人も含めると 6,000 人くらいの日本人がカンボジアに滞在しています。そのほとんどが製造業関係者です。最近では、イオンのようなサービス系で活動する日本人が増えてきています。

小林:最近、和僑という言葉が生まれました。和僑たちは、例えば、プノンペンに集まり、規模は小さいですが日本街という集積を作り始めています。絆通りに進出している日本企業の規模は小さいのでしょうか。絆通りを中心として、ネットワークが拡大していけばいいのですが。

カンボジア人の目から見て、絆通りの日本街をどのように見ておられますか。

ペンホイ:絆通りには、日本で誰も知らないような個人経営者が多いです。客はカンボジア人も増えています。日本への留学経験者が、家族をつれて絆通りに行っています。イオンが進出してきたことで、電気製品だけでなく、日本が身近に感じられるようになりました。イオンでは、着物ショーをやったり、桜の木を飾ったりして、その写真をフェイスブックに載せるんです。それでまた日本を身近に感じるようになりました。

小林:そろそろ予定の時間になりました。最新のカンボジア事情について、いろいろ情報をご提供していただき、ありがとうございました。

